

日 時 平成30年6月29日(金)

午後2時30分～

場 所 都庁第二本庁舎31階 特別会議室22

葛西臨海水族園のあり方検討会 第4回

会議録

【会議】

午後2時30分～午後4時56分

○小林課長 それでは定刻になりましたので、ただいまより、第4回葛西臨海水族園のあり方検討会を開催させていただきます。

委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、またお暑い中、ご出席を賜りましてまことにありがとうございます。議事に入りますまでの間、進行を務めさせていただきます公園緑地部再生計画担当課長、小林でございます。よろしくお願いいたします。

初めに、本検討会は公開にて開催することとしてございます。本日は、傍聴者及び報道関係者の取材がございましたことを、ご了承いただきたくお願いいたします。

次に、お配りしております資料のご確認をお願いいたします。配付資料は次第に記載をさせていただきます。

委員の皆様には、議事の途中でご確認いただけますように、これまでの検討会資料をファイルにとじ、机上にご用意しておりますほか、川廷委員よりご提供いただきました「海の環境を考える1日 トークセッション」に関する資料、こちらもお配りをしてございます。

不足資料などがございましたら、お手数ですがお声がけくださいますようお願いいたします。

続きまして、出席者でございます。本日は、文教大学国際学部国際観光学科教授の海津ゆりえ委員は、所用によりご欠席との連絡をいただいております。

また、池邊委員からは、少しおくれる旨のご連絡をいただきました。

東京都及び葛西臨海水族園を運営いたします公益財団法人東京動物園協会の出席者につきましては、お配りしている座席表にてご確認をお願いいたします。

なお、公園緑地部長及び公園計画担当部長でございますけれども、大変失礼ながら到着がおくれてございます。ご容赦いただきたくお願いいたします。

それでは、西座長、以降の進行をよろしくお願いいたします。

○西座長 では、ここから私が座長として進行を務めていきます。

本日は、骨子案をご検討いただきますが、検討会も本日を含めると、あと2回となりました。骨子案のまとめ方や記載内容の過不足など、一通りのご意見を出していただき、取りまとめの方向性を固めたいと思います。

限られた時間ではありますが、ご協力をお願いします。

それでは、事務局より資料の説明をお願いします。

○小林課長 本日は、説明資料の報告書骨子案に基づきまして、ご説明をさせていただきます。こちらの資料でございます。

参考資料としまして、A3判の比較表をご用意してございます。適宜ご確認をいただ

ればと思います。

それでは、骨子案の表紙をおめくりください。報告書の目次でございます。

大きく4つの章で構成しており、1章は葛西臨海水族園の概略を、2章は葛西臨海水族園の現状をまとめました。3章では、葛西臨海水族園を取り巻く社会状況について整理しております。4章が今後のあり方でございます。

なお、目次に記載してございます「報告書作成にあたって」「おわりに」「参考資料一覧」は、次回ご用意をさせていただければと思います。

報告書の構成として、骨子案のような流れでよろしいかにつきましても、ご検討いただければと思います。

次に、骨子案の内容をご説明申し上げます。

骨子案は、委員の皆様から事前にご指摘いただいた箇所を赤字で表記してございます。ほかに、赤字ではございませんが、誤字の修正や注釈の追加なども行いました。本日は、事前に伺ったご意見やご指摘をご紹介します。修正箇所を中心に説明させていただきます。

1章「葛西臨海水族園について」は、1ページから6ページでございます。第1回検討会資料を中心に、歴史、立地、施設概要などを整理いたしました。1章につきましては、修正等はございません。

次に2章「葛西臨海水族園の現状」でございますが、7ページからでございます。第2回検討会でご説明差し上げた内容を「役割・機能面」「運営面」「施設面」で整理いたしました。葛西臨海水族園の現在の取り組み、工夫している点、課題となっていることなどを、13ページにかけて記載してございます。

12ページをお開きください。修正箇所としまして、利用者アンケート結果概要のグラフのうち、一番右側の「足りないと感じる施設」の結果を、もともとは円グラフでございましたが、棒グラフに修正をさせていただきました。また、14ページでございますが、老朽化及びバリアフリー等に対する課題の写真を追加をさせていただいたところでございます。

続きまして15ページからは、3章「葛西臨海水族園を取り巻く社会状況」でございます。4章の「今後のあり方」に結びつく背景をまとめてございます。

15ページから17ページをごらんください。修正が終わってございませんが、そちらの箇所から説明をさせていただきます。

まず、SDGsを15ページで現在、記載してございますけれども、ほかの項目と並列でまとめてございます。SDGsはやはり上位の概念とすることが適当ではないか、とのご指摘をいただきました。

現在の資料でございますが、15ページが(1)「持続可能性」、16ページに(2)「生物多様性保全」としてございますが、こちらの内容はいずれもSDGsに関連するものでございます。そこで、SDGsを3章の導入部分に記載をしまして、個別課題として教育

や調達、生物多様性という構成でまとめるというやり方をしてはいかがかと考えてございます。

そして17ページ、(3)以降につきましては、葛西臨海水族園の今後に関連する事項ということで、SDGsとは分けて整理をさせていただくという形で整理ができないかと考えております。

次に、修正をさせていただいた箇所でございます。

17ページから19ページにかけては、まず言葉の整理をさせていただきました。本検討会は、水族館のあり方を取りまとめていただくというものですので、水族館を先に書くと、強調させていただくという表記の仕方をさせていただきました。

また、19ページでございます。③のタイトルを「水族館及び動物園の法的位置付け」とさせていただきます。博物館法に基づく登録のほか、都市計画法、都市公園法での位置づけを追加させていただきます。そちらが19ページ、並びに次の20ページの上段にかけて修正をさせていただいてございます。

次の21、22ページは「都立動物園水族園」という表現で統一をさせていただくという修正をかけさせていただきます。

3章の修正は以上になってございます。

そして24ページからは4章「葛西臨海水族園の今後のあり方」でございます。

24ページでございますけれども、導入部分を大きく修正をさせていただきました。事前のご指摘の中で、水族館は楽しい場所であり、海に興味を持っていただき、海を好きになってもらうことが大切ということですか、アクセシビリティや共生というのは重要なキーワードではないか、などのご指摘もいただきました。

本日ご欠席の海津委員からのご指摘でございますけれども「4章のあり方は、現在の葛西臨海水族園がこう変わる、という思いが伝えられるようにまとめるべきではないか。展示のストーリー、時間の使い方、活動内容、施設の利用しやすさなど、利用者に対して分かりやすく伝える必要があると考えます。導入部分は、あり方を考える上で重視する点だけでなく、こう変わる、という記載があるとよいのではないか」というご指摘をいただいたところでございます。

骨子案では、重視する点としまして、葛西臨海水族園が、海と人とをつなぐ架け橋となり、持続可能な社会を実現することに貢献し、生物多様性を守り、あらゆる人たちにやさしい施設となるとともに、魅力的な観光拠点になる、と整理をし直させていただきました。

なお、①「海と人とをつなぐ架け橋」でございますけれども、3章までに具体的に関連する記載というものが論じられていなく、唐突感があるとのことご指摘もいただいております。

水族館の集客力などにつきましての記載を、3章、ページは少し戻ってしまいますが、19ページをごらんください。19ページの②「首都圏の主な水族館の比較」という項目がございますけれども、この中に水族館の集客に関する内容などの記載をして、4章につ

なげるといような書き方にしたほうがいいのかというご意見をいただいております。

また24ページをごらんいただければと思いますが、24ページの③「生物多様性を守る」の欄でございますけれども、現在は「生き物一つひとつに個性があり、全ての生き物が直接又は間接的に支えあって生きている」と書いてございますけれども「人間を含めた全ての生き物が直接又は間接的に支えあって生きている」ということでございますので「人間を含めた」という表記を追加させていただければと思います。

続けて、ミッション、ビジョン、プロミスでございます。

ミッションについては、何を据えることが適切か検討する必要があり、最初の1つだけでよいのではないか、とのご指摘もいただきました。

海津委員からも「ミッション、ビジョン、プロミスは、似ていることを切り張りしてまとめているため、方向性がややずれているように感じます。修飾語をそぐと分かりやすくなるのではないか」ということと「人たちと人材、施設と拠点など、似た言葉があるため、使い方の整理をしたほうがよいのではないか」とのご指摘がございました。

ビジョン及びプロミスの赤字ですが、ご指摘いただいた一部の順番を並びかえたというものでございます。

また、プロミスの3点目「海と人のかかわり」と現在、記載をしておりますけれども、これは「海と人とのつながり」に改めるべきとのご指摘もいただきました。

また、黄色で着色しました「あらゆる人たち」でございますけれども、子どもから大人まで、年齢、障害の有無、国籍なども問わずにご利用いただきたいとの考えから、現在「あらゆる人たち」という表現を使用しておりますが、この表現につきましてもご検討いただければと思います。

26ページからは「今後の葛西臨海水族園の機能と取組方針」でございます。

26ページには、各機能が並列の関係ではない旨を追加いたしました。

なお、環境保全につきましては、事務局より提案がございます。本日の資料は「環境保全への貢献」として記載をさせていただきました。葛西臨海水族園では教育を通じた普及啓発など、間接的に環境保全に寄与するという側面が強いため「環境保全への貢献」という機能としてはいかがかと考えたものでございます。この点につきましてもご検討いただければと思います。

27ページ、関連イメージをごらんください。

葛西臨海水族園の6つの機能として整理をさせていただきましたが、この機能を樹木に例えたとき、花や実というのは枯れて散ってしまうため「教育」「レクリエーション」「環境保全への貢献」をこれに据えることには違和感がある、とご指摘がございました。木が成長するには水や光、養分などが必要で、水族館だけでは成長できない、さまざまな人たちとともに成長するという見せ方にしてはどうか、とご提案をいただいております。

28ページ「飼育・繁殖」をごらんください。生き物の収集は自然環境への負荷に配慮

すること、動物福祉を考慮することなどを、追記をさせていただきました。

次の「展示」でございます。水槽をただ見るだけでは海を好きにならないのではないかとのご指摘から、海を好きになるような仕掛けの必要性を追記いたしましたものでございます。

また、修正ができてございませんが、展示に癒しが入らないことに疑問がある、海のスケール感が表現されていない、とのご指摘もいただいております。

29ページ「教育」でございます。「教育」では、対話型の解説において、利用者に寄り添うことが大切とのご指摘をいただきまして「利用者の年齢や興味などに沿って解説する」という旨を追記いたしました。

「レクリエーション」につきましては、修正などは行ってございませんが、レクリエーション本来の意味、回復や再創造を注釈でお示しし、葛西臨海水族園におけるレクリエーションを取りまとめるという記載の仕方にしてございますが、このような書き方でいかがかというところをご検討いただければと思います。

次に、30ページをごらんください。「展示基本構想」でございます。

導入部分は、展示の取組方針との関係性が分かりにくい、ビジュアルがイメージしにくいなどのご指摘を踏まえ、追記をしたというものでございます。

続きまして(1)「展示基本構想の前提」から35ページまでをまとめてご説明させていただきます。

ご指摘としましては、まず、速度や浮遊感を感じながら景色を見るなど、海にもっと親しんでもらう体験が重要ではないか、でありましたり、人との関係や文化の展示がどこまでできるのか明らかにできるとよい、といったこと。また、海津委員からは、32ページ「展示水槽の構成」についてご指摘をいただいております。

32ページでございますけれども、こちら「展示水槽の構成」としまして、選定する生態系、水槽の例といったものを挙げさせていただいております。もとのままですと「並べて見せるなら流れが欲しい」というご指摘がございました。「東京圏の淡水、東京湾、伊豆・小笠原諸島までは地名なのに対し、それ以降は岩礁、砂地などの標記のため、流れが分かりにくい。例えば、水鳥が空から俯瞰して水槽間を旅するというようなストーリーがあるとよいと思う」というようなご指摘をいただいたところでございます。

そこで、30ページにもう一度お戻りいただきますけれども、30ページ(1)「展示基本構想の前提」でございますが、こちらに流れについてまず追記をいたしました。また「展示基本構想の前提」の一番下、4点目でございますけれども、そちらの中で、人の営みや文化などを伝える展示を検討する必要性といったところを追記させていただきました。

続けて、32ページをもう一度ごらんいただければと思います。「展示水槽の構成」として、東京湾流域から伊豆諸島・小笠原諸島までを「東京の生態系」、サンゴ礁以降を「海の代表的な生態系」と記載をさせていただきまして、単純な並列関係ではないといったことが表現できないかと考えております。

「海の代表的な生態系」は、東京湾や伊豆諸島・小笠原諸島にもございますけれども「東

京の生態系」は大きなテーマであると考えまして、構成上、分けて記載をさせていただいてございます。

33ページ、34ページは、新たな「展示水槽の例」としてお示しをいただきました。32ページの「展示水槽の例」の中で「サンゴ礁」と「大洋」という2つの展示につきまして、もう少し詳細なイメージとしてお示しをいただいたというものでございます。

海の奥深さ・雄大さに触れる「大洋」の水槽が33ページ、成長の過程・命の営みをもに見守る「サンゴ礁」の水槽が34ページとなっております。

こちらにつきまして具体化に当たっての留意点が、またページが戻ってしまいますが、31ページに、運営などのコストを含め、詳細な検討を重ねることなどの記載をしていただいております。

また、新たな展示水槽、いわゆる大水槽でございますけれども、海のスケール感が分かる大きさとして、大洋、サンゴ礁のほかに、海藻の森があるとよい、とのご意見もございました。

次に35ページでございますけれども、こちらでは「展示水槽をつくるにあたり考慮すべきこと」としまして、水槽内の仕掛けや形状、設備などの例を挙げていただいております。

例の1つの中に、海にもっと親しんでもらう体験につながる例というところで、赤字のところがございますけれども、魚の目線で水槽内を自由に見られるような装置の設置、また、生き物の成長過程が観察できる、といった記載を追記をさせていただきました。

36、37ページでございます。こちらは、運営に関する方針となっております。

36ページの(1)「ファンの増やし方・広報」は、事前のご指摘を踏まえ、追記、修正をさせていただきました。友の会に対する特別なサービスの提供ですとか、生き物の新たな魅力の発掘、葛西臨海水族園の新たな視点での利活用などとして、整理をさせていただいております。

(2)「情報の発信」につきましては、順序立てて再整理をさせていただきました。

次の(3)「連携のしかた」では、さまざまな組織・団体などとの連携を、葛西臨海水族園から積極的に進めるべきとのご指摘から「積極的に」という言葉を追記いたしました。

(4)「経営の視点」ですが、ボランティアのクオリティを確保し、長期的に参加していただくための仕組みを整えることが必要とのご指摘から、修正をさせていただきました。

さらに、施設や事業は、評価だけでなく点検も必要とのご指摘をいただき、修正してございます。

37、38ページでございます。こちらは「求められる施設性能」と、次は6としまして「その他」として記載をいたしました。

事前のご指摘としましては「求められる施設性能」の(2)「水族館機能等の発揮に必要な性能」のうち、ページは38ページに移りますけれども、38ページの上から5点目でございますが、どのような役割の予備水槽かが分かりにくいというご指摘をいただきました。

て「検疫や繁殖、治療等が可能な予備水槽」と記載をさせていただきました。

修正点としては以上となっております。

最後に、骨子案でございますけれども、今回、内容として漏れがないように、かたい表現を使い整理をさせていただきました。本日、報告書の取りまとめの方向性を固めていただきまして、次回に、あり方のポイントをできるだけ分かりやすくまとめた概要版も準備ができないかと考えてございます。報告書は利用者に向けた表現でまとめるべきとのご指摘をこれまでもいただいておりますが、事務局からは、この骨子案をベースとして報告書、そして、ポイントを整理した概要版という2つの構成で取りまとめられないかということをご提案させていただきたいと思っております。

以上、大変雑駁ではございますが、説明を終わらせていただきます。

○西座長 盛りだくさんですね。ちょっとどこまでできるか不安なところもありますが、本日は皆様からのご指摘の箇所を中心に、骨子案の内容について検討していきたいと思っております。

まず第1章、第2章、1から14ページです。葛西臨海水族園の歴史、立地、施設概要や葛西臨海水族園の現状について、ご意見などありましたらお願いします。

ここでのご意見はできるだけ具体的に「このように記載したほうがよい」とか、修正案を具体的に、お気づきになられたところを示していただければと思います。よろしく願います。

○佐藤委員 1つよろしいでしょうか。全体像の中での対応関係をやはりきちんと意識しておいたほうが良いような気がしております。例えばこの施設の中で、どこかに葛西臨海水族園がCO₂削減を義務づけられた施設であるという記述があったと思うのですが。

○小林課長 12ページの部分です。

○佐藤委員 ごめんなさい。12ページですか。

これは義務づけられた施設であるということと、今後の取り組みとの対応がうまくとれていないような気がする。つまり、これを義務づけられているのであれば、今後きちんとこれに対してはどう応えるという記述が後半のどこかにあってしかるべきかなと。そういったところを幾つか洗い出すことは可能ではないかと思っております。経費削減の取り組みの中で、海水使用量をどこまで抑える、どうやって抑えるとかいったことに関するビジョンが、やはりこれもまた後半にあってほしい。

具体的には10ページの真ん中あたりの「経費削減の取組」の部分ですけれども、それについて、ではどうするのかといったところの、言ってみれば方向性、答えは無理でしょうけれども、方向性のある程度、後半でも示しておかれるとよいのかなというふうに思います。

そういうことをやろうとすると、現状が知りたくなるのですよ。これも例えば、CO₂の温室効果ガスの排出削減、今どの程度の排出量であるかという評価はなさっていましたでしょうかね。

○小林課長 毎年報告をしてございますもので、ちょっと今、手元に資料がないのですが、それはございます。

○佐藤委員 ということは、その現状をきちんとここでレビューなさって、今後どこまでやるかというのを、やはりパリ協定を本気で意識するのだとしたら、限りなくゼロにしなければいけないわけですし、それはぜひその方向で、本格的にご検討いただきたいと思っています。

同じように、現在の海水使用量もデータがございますよね。

○小林課長 そちらはあるのだと思います。

○佐藤委員 その辺も少し具体的なデータを示した上で、それに対応する何らかの目標ないしビジョンを後半で記載していただければ、より具体的な方向性というのが見えるのではないかと思います。

○西座長 どうもありがとうございます。事務局のほうはよろしいでしょうか。

○佐藤委員 実施状況、13ページにありましたね。済みません。

○西座長 事務局のほう、今のことについてよろしいですか。

○小林課長 できる範囲でのまとめになるかもしれませんが、やらせていただきます。

○西座長 ほかにほなたかございますか。

○木下副座長 この報告書の組み立てですよね。構成、今、1から4章で成り立っているわけですが、今は1と2章だけですよね。

1と2に関しては、基本的にこれでいいと思うのですね。1は歴史と、それから施設の概要。2が現状と。これ、タイトルは「課題」にはなっていないのだけれども、課題は外したのですか。

○小林課長 課題もいろいろございますが、課題も含めて「現状」として今回、整理をさせていただきます。

○木下副座長 2章の内訳を見ていくと、施設面のところに課題というのが幾つか出てきますよね。今、目次を見ているのですが。

2で現状を精査して、課題は何であるかというのをあぶり出して、それから3章が社会状況、水族館が置かれている背景といいますか、それを踏まえた上で、4章で、では今後どうしようという、そういう組み立てになっていると思うのですね。ですからこの構成はいいと思うのですが、ただ、4章、もう少し大きな話と具体的なところを2つに分ける手もあるかなというふうには思っています。

その上で現状を改めて読み返したのですが、例えば、先ほどのご指摘にもつながるのだけれども、2章で使っている言葉が、あるいは2章で指摘している問題が、後半できちんとそれを受けとめて論じているかどうかというところを全部チェックしたほうがいいと思うのですね。

3ページの真ん中あたりに、建設時の理念で『海と人間の交流』の場を掲げています。

これは「現在も続く理念である」というふうを書いてあるのですね。「海と人間の交流」という言葉は、後半で出てこないように思うのですが。出ていないのですかね。

こういった問題を、もうこの言葉はやめるのだというような、そういう確認が必要かなと思うのですね。ですから、これは別の言葉で言いかえていくということでもいいとは思いますが、その辺の確認作業というのをきちんとやった上で、報告書をまとめていくということが必要かなと思いますので、きょういろいろ指摘した上で、次回に修正していくということかと思います。

以上です。

○西座長 どうもありがとうございます。重要なお指摘だと思います。

ほかに具体的なことでも結構ですし、今のような全体的なことでも結構ですが、いかがでしょうか。

よろしければ後が大分ありますので、次に行きたいと思います。

次、3章です。報告書で言えば、15ページから23ページまでのところ。

3章では、骨子案に反映されていない指摘として、SDGsの扱いがあります。SDGsは、持続可能性や生物多様性保全のほかの取り組みの上位概念に当たるため導入部分に記載し、(1)、(2)を再編成すべきという提案がありました。

また、18ページからの(4)「国内の水族館及び動物園の動向等」では、ご指摘を踏まえた修正案が示されています。

そのほか、お気づきの点を含めてご検討いただければと思います。いかがでしょうか。

○鳩貝委員 今の修正の意見、基本的に賛成なのですが、17ページの②の海洋基本法、海洋基本計画ですけれども、これが今のお話ですと、SDGsに埋もれてしまうような気がしたのですが。海洋基本法はもう少し独立性といいたいまいしょうか、大きく扱うということも必要かなと。やはり海に囲まれている日本、その中でも東京都の役割といいたいまいしょうか、小笠原沖までずっとあるということを踏まえて、海洋基本法も、もう少し柱の中に入れておいていただいたほうがいいのか、というふうに思ったもので。私のただの感覚なのですけれども。

○西座長 いかがでしょうか。今は生物多様性保全の中の1つとして扱われているという感じですね。今はね。確かに海洋基本法というのは大きな柱になるかなという気がするのですけれども。

○佐藤委員 今の修正の案ですと、SDGsを3の頭のところに持ってくるということですよ。

○小林課長 社会状況の中で、一番最初にSDGsという上位概念を書かせていただいて、その中で、例えば今②「持続可能性に配慮した調達」については、例えば「調達について」。SDGsで言いますと目標の12に当たりますとか、16ページ③のESD「持続可能な開発のための教育」につきましては「教育について」のようにさせていただいて、目標を読む、のように書くということのも1つではないかと思いました。

○佐藤委員 今まさに海洋基本法がその中に埋もれてしまうというご指摘がありました。僕もそのとおりだと思ひまして、SDGsはやっぱり2つのコンポーネントからできていて、1つは基本的な哲学の部分ですね。持続可能性という価値が大切であり、そのような社会を実現するために劇的な社会の転換が必要であり、その際には「誰一人取り残さない」という公平性の概念が大事であるという、その基本的な哲学の部分は、僕は頭であっていいと思うのですよ。そのようなところは、今や世界的な潮流となり、1つの価値観となっているということを、SDGsを例に引いて頭の部分できちんとお書きいただくというのは大事だと思います。

「国内外の主な動向」の「持続可能性」という項目は、実はこれは非常に大事でして、この項目の中に調達も入ってくるし、教育も入ってくるのだというふうに考えておくのがいいのではないかと思うので、現在の構成のほうがよくて、その場合には、このSDGsの17ターゲットを紹介するのが(1)に来るのではないかと思います。

具体的にこのようなことが目標として掲げられていて、特に水族館を、今後のあり方を考える上では、どのターゲットが特に関連性が高いのかといったことが、(1)の①のSDGsの中で整理されているというふうな形をとると、今よりも非常にすっきりしますし、先ほど来のご指摘の、SDGsはやっぱりより上位概念だということにも応えられるのだらうと思います。

ついでに、同じように、愛知目標がこのような形でターゲットごとに四角にくくってちゃんと整理してあるので、SDGsも同じようにできると思うのですけれども。ターゲットの部分に関しては。

○木下副座長 3章に関して。1と2は前文に当たるものがないのだけれども、3章だけあるのですね。冒頭、15ページの最初の言葉がありますよね。前文なのか、序文なのかよくわからないのだけれども。ここはやっぱりちょっと整理したほうがいいなと思いました。

具体的に言いますと、注釈つきですが「海洋の生態系サービス」という言葉と、それから、その同じ行の「海の恵み」という言葉の関係をどう使っていくのかということなのですけれども、次のページ、17ページを見ると「海洋の生態系サービス(海の恵み)」と真ん中でも書いてあるのですね。

それから16ページは、愛知目標の中に「目標14 自然の恵み」というのがあって。「海の恵み」というのはものすごくこなれた日本語としてすっと入ってくると思うのですが「海洋の生態系サービス」と言われると、注釈つきでもそんなにすっと入ってこないという感じがして。だから、このあたりの言葉づかいを整理する必要があるかなと思います。

こういった各章の頭にもしこういう序文のようなものをつけるのであれば、4章がもう決定的に重要なので、4章の頭も、もう一回きちんとこなれた文章が必要かなと思います。

もう1点あって、19ページの「水族館及び動物園の法的位置付け」なのですが、冒頭に博物館法が出てきて、その次に都市計画法が出てきていますけれども、法的位置づけと

いう意味合いで言うと、もうほぼ対等なのですよね。博物館法では条文にはうたわれていない。条文にうたわれているのは都市計画法なのですが、同じ法的位置づけということで、ちょっとこの扱いが少し差があるので、ここも、もう少しフラットにしたほうがいいかなと思います。

○佐藤委員 今の「生態系サービス」の点だけ、ちょっと1つ。

「生態系サービス」イコール「海の恵み」で私は構わないと思います。その場合に、恐らくこの文章の中では「海の恵み」を主に使い「海の恵み（海洋の生態系サービス）」になるのではないかと思います。

その心は「海の恵み」というのは、非常にある意味では一般的な言葉ですので、そこから得られるイメージというのは非常に曖昧であり得るし、場合によっては本当に狭く見てしまうと、もう食べ物しか思い浮かばないということが起こりますが、括弧して「生態系サービス」を入れておきますと「海の恵み」に非常に多様なものがあるというのが、これは、ある意味では学問的に既に確立しておりますので、そこを、ここで使っている「海の恵み」というのは、より多様な生態系サービス全体を指すのだよとわかるような形でできると思いますし、この括弧に入れた「生態系サービス」の注釈があるという状態で、私はよろしいのではないかと思います。

○西座長 今の「生態系サービス」と「海の恵み」のところの括弧で「生態系サービス」を書いていくというのは、ずっと通してそうしていくのか、最初だけそうしておけば。

○佐藤委員 いえ、初出だけでよろしいのではないのでしょうか。

○西座長 それでいいですね。では、そこはそうさせていただきます。

SDGsのことは、先ほど佐藤委員が言われたような方向性でやっていくということで、ほかの委員の方よろしいでしょうか。

では、幾つかの項目を四角く囲ってここへ……。

○佐藤委員 ターゲットですね。

○西座長 ほかにこの第3章で。

よろしければ、それでは第4章のほうで「今後のあり方」に入らせていただきます。

検討会が示すあり方として適切な内容かどうかという視点から、ご意見をいただきたいと思います。まずは24ページ頭から、26ページの導入部分と「あるべき姿」についてご検討いただきます。

事前に、現在の葛西臨海水族園がこう変わるという思いが伝わるようにまとめる必要がある、それからミッション、ビジョン、プロミスは修飾語をそぐなど、言葉の整理が必要である、ミッションに何を据えることが適切か検討する必要がある、などのご指摘をいただきました。

「あるべき姿」は今回の報告書の中核となるパートですので、さまざまな視点からご提案をいただきたいと思います。また「あらゆる人たち」という表現が適切かどうかなどの言葉の使い方、また、報告書と、ポイントをまとめた概要版という形で取りまとめること

など、ご意見をいただきたいと思います。

いろいろありますが、よろしくをお願いします。

○佐藤委員 軽いところから行きますが、4の頭の①、②、③、④、⑤で整理されている、どのようなものであるかという部分の日本語の問題なのですが、例えば①の中に「興味を持ち・海を好きになってもらう」、それから②に「理解してもらう」、③に「知ってもらう」、この表現は避けたほうがよろしいだろうと思います。これはわかりやすく言えば、人々は興味を持っていない、知らないというのを前提にしています。そのようなことは全くないのであって、これは基本的には比較級で書いたらよろしいと思います。つまり「興味を深める」とか、あるいは「知識を深める」とかいった形で、今あるものよりもさらにそれが深化するような形で記述しないと、読む側が反発いたします。私も反発しなくなった。

○西座長 どうもありがとうございます。「高める」とか「深める」とか。

○佐藤委員 そうですね。「高める」「深める」。

○西座長 ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。

先ほどの木下先生の前文をあれするというのは、こここのところのポツで書いているようなところを、3のようなもう少しフラットな書き方というか。

○木下副座長 というよりも、先ほどの前文に当たるものはこのポツ2つの最初の3行ですが、これ、別に報告書にいらぬのではないのかなと思うのですね。恐らくこの赤で新たに加わったものは、前文に当たる場所の整理だと思うのですが、ただ、確かにこの次のページですよ。25ページの「あるべき姿」との関係がちょっと重なっている感じもするのだけれども、何かわかりにくいのですよね。

例えば、一番重要なのはやっぱりミッション、ビジョン、プロミスを明確にここで提示することのはずですよ。ミッションの中に「海と人とのつながりを通し、海への理解を深める」という、これはすごく明快な表現だと思うのです。それに対して「海を好きになってもらうこと」というのは、確かに今、佐藤委員が指摘したような「何々してもらう」というのは非常に奇妙だなと思いますので、この24ページと25ページの関係をどうするのかということかなと思います。個々の文言は、もちろんこれから検討しないといけなもののだけれども。

この前の段階ではまさに前文に当たる部分を、こういう形で新たにもう少し書き加えたということですよ。

○小林課長 はい。

○木下副座長 要するに、箇条書きにしたということですよ。

○西座長 この箇条書きで、箱に囲って「+」「+」となっているのですけれども。

○木下副会長 3グループの意味もちょっとわかりづらい。

○佐藤委員 1つ提案がございしますが、よろしいでしょうか。

もしかすると本当は、最初のセクションで、この四角の中にくくったようなところで書きたかったことというのは、それ以前の現状と、それから「社会状況を踏まえ」というと

ころに尽きるのだと思うのですよね。つまり、ここで書かれていることは、実は前の章と対応がとれるはずなのですよ。だからその対応関係がわかるように、例えば持続可能な社会の実現に向けて、2つ目の四角があるわけですよね。海と人とは乖離しているという現状認識があれば、一番目の四角というのもきちんとそこと対応し得るといふ、そういう関係で、水族園の現状と取り巻く社会環境の中のこの部分に着目して、このような形でまとめますという整理の仕方であれば、非常にいい流れになるのではないかというのを提案したいと思います。

それからちょっと具体的な提案ですけれども、2つ目の四角の④は、恐らく⑤の、つまり「あらゆる人たち」という枕詞がつくやつはどこかにまとめて、本当に全ての人たちにとって魅力的な施設となるという、その現状はそうではないという認識から発生した項目として、まとめられたらいいだろうと思います。

そうするとこの3つのは、海と人をつなぐ架け橋になり、持続可能な社会の建設に貢献し、ありとあらゆる人にとってすばらしい施設になるのだという、その3つの整理だったらわかりやすいかなと。ただし、足し算ではないだろうから「+」「+」はやめたほうがいいかもしれないと思います。

○西座長 確かに④と⑤というのは似たようなところで、上の2つとは違っているような感じがしますね。1つにくくってありますけれども。

○小林委員 ⑤については、恐らく魅力的な施設になることによって、その結果、葛西一帯の魅力を高めたりとか、観光拠点になるとかという、またちょっと別の次元の問題が含まれているような気がするの、あらゆる人たちにとってやさしい施設になったりとか、魅力的になるということと、観光拠点になったりとか、何かしらそういう、ある意味、地域活性につながるということに分けて書いたほうがいいのかというふうにも思います。

○西座長 ⑤を2つに分けるといふこと。

○小林委員 そうですね。④と⑤の前段、この文章のうちの半分が一緒になって、最後の「葛西一帯の魅力を高めること」といふのは、何か観光拠点であったり、地域活性とかというふうな形で整理されるといいのかなと思いました。

○西座長 ここらが混乱している感じがしますね。

○木下副座長 それと、3つのグループに分けなくていいと思いますよ。もう1から5までは並列に書けば。

それで、先ほど小林さんのご説明で「人間を含めた」といふようなことをここでおっしゃったように思うのですが、それは新たにどこかに加わるのですか。

○小林課長 ③なのですけれども「生物多様性を守る」といふところでございますが「生き物一つひとつに個性があり」の後に「人間を含めた全ての生き物が」と。生き物は、魚ですとか、鳥、哺乳類だけというふうについ捉えてしまうこともあるかもしれないのですが、人間も含まれます。そこも含めた多様性ですといふところは、しっかり書かないといけないというご指摘をいただきました。

○西座長 人のほうがいいね。

ここについても、これ以上具体的なことはちょっと時間がかかるかと思いますが、今のことを踏まえて、事務局のほうでもう一度整理してもらおうということでもよろしいでしょうか。

それでは、1の25ページの「あるべき姿」のほうから。前段は終わって。

○佐藤委員 「あらゆる人たち」はどうしましょう。

○西座長 「あらゆる人たち」というのはね。何かもう少し厚さを持たせたいという気持ちが私はあるのですよ。本当に小さなやっとな歩けるような子どもから、ストレッチャーに乗った年寄り、それから日本語わからないような人とか、いろいろな人たちが利用できるのが水族館ではないかなというので、どこかそういうものを「あらゆる人たち」と書いて、下に注釈を入れるというのはどうかなという気がするのですけれども。単に「あらゆる人たち」というだけではちょっと軽いような気がして、私は仕方ないのですけれども。

○佐藤委員 私も今、西座長がおっしゃられたのと全く同じ感覚を持ちました。恐らく「あらゆる人たち」というときに、水族館という施設が、実は本当に歩けない人でも、あるいは子どもでもという、そういう者に対して開かれた、そういう方々が楽しむことができるポテンシャルを持っているのだという指摘がどこかにあって、だからそのような方々にきちんと対応できる施設にしたいのだという、そういう書き方でないといけないと思います。

ですので、恐らく現状の部分か何かに、あらゆる人たちにとって開かれた施設である。そのあらゆる人たちというのは、こういう人まで含まれる。これが水族館という施設の非常に重要な特徴なのだということをどこかに書いておいて、それを受けてここに出てくるのであればいいのではないかと思うのですけれども。どこに書くかはよく考えていないのですけれども。

○西座長 18ページの「国内の水族館及び動物園の動向等」とか、どこかこのあたりに。

○佐藤委員 社会状況よりはあれではないですかね。

○西座長 社会状況より前ですかね。

○佐藤委員 ええ。

○鳩貝委員 9ページの「運営面」の最初の(1)、ここにかかわるのかなと。現状でやっぱり今、バリアフリー対応も非常に不十分だというようなことがあって、多分こういうものが大きく取り上げられているのではないのかなというふうに私は理解をしていたのですけれども。やはり我々も使わせていただきましたけれども、エレベーターがああいう状況ですとか、いろいろな面、施設面がそういう対応ができていないとか、それから外国の人たちへの対応もまだまだ不十分であろうし。というようなことがあって、私は単純にここを「あらゆる」で受けていたのですが、確かに何かしっくりとしない言葉かなとは思ってはいるのですけれども。何かいい提案というものがちょっとないのですけれども。

○西座長 水族園の現状があって、それを取り巻く社会状況というのがあるのですけれども、そもそも水族館の持っているポテンシャルとか、そういうことを指摘する項目が抜け

ているのですよね。先ほど言われたような、水族館というのはもともとこれだけのポテンシャルを持っているのだと。それでいろいろなことをしていく、今の社会においてSDGsだとか、そういうことを進めていく上で、非常に大きな力になるのだと。葛西臨海水族園をめぐるではなくて、水族館そのものがそういう力を持っているのだよということで、現在の社会の中でそういう水族館の力をそこに注ぐ。そういう施設に水族園はなるべきだというような、何かそのところがちょっと欠けてしまったような気がする。いろいろ見ていくと。

○小林委員 だとすると、4章の冒頭の文章の中にそういったことがうたわれれば、すごくしっくりきますよね。

○西座長 4章ですね。

○佐藤委員 ここの頭にそれを入れると、しっくりきますよね。

○川廷委員 多分そのポテンシャルの部分、背景はやっぱりちゃんと前段で書いておいたほうがいいのだろうなというのは確かに感じます。自分もそういう意見を大分言ってきたような気がしますので、その肝心な部分の確かに抜け落ちてしまっているなという感じはいたします。要するにポテンシャルですね。関係者以外の人間としてかかわってみて、水族館の深みを随分、理解をさせていただいたこの委員会ですので、その部分を前段の部分でぜひちょっと書いていただけたらなと。

今ご指摘があったように、4章の部分は今こうやって箱に入ってしまったんですけども、さっき木下先生もご指摘あったように、前文は、できたらこの4章の部分は今のようなものを、ポエムのように情緒的なものをここに持ってきて「あらゆる人」というものをどのように包含しているかという、今の委員の中で温かい気持ちで「あらゆる人」を述べているのではないですか。その部分をポエムにしてここに書き出すことで、この委員会の皆さんに申し送りたい気持ち、熱みたいなのをここに置いておくといいのではないかなというのを感じました。

○西座長 前段でどこかに今のような。

○川廷委員 もう少しつけ加えますと、例えば企業でミッション、ビジョンを記述するとき、最初にやっぱり創業者精神みたいなものを書くのですよね。それを受けてミッション、ビジョンというのを、大体ステートメントを書くので、そのいわゆるステートメントの部分がここは整理できていないから、こういう議論になっているのだと思います。ですので、これまで1、2、3章で述べてきたものを踏まえて、これからの水族園、この施設のあるべき姿をステートメントポエム、情緒的なものを置いて、ミッション、ビジョンにつないでいくと、整理をしやすくなるかなという感じがしました。

○西座長 ありがとうございます。

○木下副座長 ちょっとそのポエムというのはよくわからなくて、普通そういうものを書くのですかね。

というのは、今はこの25ページのミッションの中に3つ挙がっていますよね。「海と人

とのつながりを通し、海への理解を深める」、これはすごく明快だなと思って。これは、これまでに使ってきた『海と人間の交流』の場」のバージョンアップなのかなというふうに受けとめたのですね。

問題はその後で「あらゆる人たちに海を届ける」というのは、実は何かよくわからない。突然ね。これは何かポエムっぽいなということを思えば、やっぱりそういう思いというか、水族館というものの持っているポテンシャルというものをもう少し訴える言葉で、ここに書き込むということですよ。

○川廷委員 そうですね。それをこのミッション、ビジョンの前の部分で、ステートメントのような形で、ポエムと言うとちょっと抽象的になってしまうのですけれども、要するにステートメントなのですね。こういう施設を目指したいのだという、まさにあるべき姿を文章化すること。それがあらゆる人を置き去りにしないというSDGsの理念も入っているし、新たな変革を起こすことで常に魅力を発信していく、みたいなことだったり。何かそういうものが、この1、2、3章で議論したものをうまく文章化することで、今のミッション、ビジョン、今度は具体的なミッションとビジョンに表現していくブリッジのようなものにも、なるのかわからないですけれども。この委員会の思いですよ。それを文章化するという形……。

○木下副座長 「海を届ける」という表現は、非常に漠としていますよね。

○川廷委員 とっても夢があるような感じがして、情緒的でいいかなと。

○木下副座長 それをミッションの1つとしてうたうのか、ミッションの1つとしてうたうには何かちょっとあまりにも漠とし過ぎているなというのは思って、事前にもそれを申し上げてきたのだけれども。

○小林委員 (1)のミッションのところに入れるのだとしたら、確かにもしも私だったら「あらゆる人たちが海に接する機会を創出する」とか、そういうほうなのかなという気もしますね。それで、この前段のところ何かポエム的なものをつくるとしたら、その中にそういうことが入るのかなという、そういう整理でしょうか。

○千葉委員 アクセシビリティのことについてお打ち合わせのときにお話しさせていただいたのですけれども、オリンピックのほうで組織委員会がアクセシブルツーリズムとか、アクセシビリティとか、ガイドラインを出していて。ここ、下のほうに12と13で……。

○西座長 何ページですか。

○千葉委員 ごめんなさい。24ページですよ。24ページの下のほうに、用語「社会包摂」とか「アクセシブルな環境整備」とうたっておりますけれども、やはり例えばオリンピック組織委員会は「社会包摂」のことを「インクルーシブ」と言っているのですよね。「インクルーシブ」とか「アクセシブル」。そういった言葉を、用語の説明を小さくフォントで下を書くというよりも、それ自体がもっと大きく語られてもいいのかなと。「インクルーシブ」はあらゆる人たちを含むという意味でございますよね。カタカナにする必要はないと思うのですけれども、こういった注釈を逆に上に大きく持つてくるという用語の説明も必

要なのかなと、少し思いました。

○西座長 ありがとうございます。先ほどの水族館のポテンシャルをどこかに入れようと思って見てきたのですけれども、「国内の水族館及び動物園の動向等」のあたりに入れられないかなと思うのですが。

○木下副座長 やっぱり19ページあたりの、現状を考えていく上での、これはあくまでも葛西を離れた水族館の持っている能力ですよね。だから法的に非常に曖昧だということを行い、一方で、水族館というのはこういう潜在能力というものを非常に大きく持っているというのは、やっぱりもう1つ、ここに書き込む。

○西座長 もう1項目、何か……。

○川延委員 項目をふやしたほうが良いと思います。

○西座長 では、その方向でちょっと。

○木下副会長 これは本当に、24ページをどういう性格のページにするかですね。葛西に向けてのこの委員会の熱い思いみたいなものが、ここに必要かなと。そうでないと、4章のタイトルが「あり方」で、次が「あるべき姿」で「あるべき姿」はもう具体的にミッション、ビジョン、プロセスを示していくということですので、24ページを少し、もう一回練ると。

○西座長 根本的にもう一度練り直すと。

○木下副会長 はい。基本的にはこういうことの良いと思うのですが。

○西座長 この委員会の思いをここに詰めるということで。大変かと思うけれども、頑張るって。

○小林課長 24ページなのですからけれども、今のお話いただいていることをまとめていく形にはなるかと思うのですが、今お示しました5つの視点というのは、これは大きくずれなく、まとめさせていただくということではよろしいでしょうか。

○西座長 それはいいですね。

○木下副会長 はい。

○鳩貝委員 私は3ページにあります、現在の水族園ができたときの「基本的な目標として、以下の点を挙げている」というのが、非常に項目、はっきりと書いてあるのですよね。それと今の24ページを対比させると、具体性がここは、具体性なくてもいいのかもしれないのだけれども、3ページの前の基本的な目標というのが、これはすごくすっきりしているなというふうに思って、見比べていてどうしたらいいのかなと。特に今後の説明など聞いていて、3ページの四角の中の下から2つ目の「飼育技術の水準を向上させる研究機能の充実」とか「学校教育との連携、内外研究機関との交流」という部分が、この中に、新しいほうにもう少し具体的に書かれたほうが良いのかなともちょっと思って。要するに、市民に対するサービスのような部分は非常にいろいろ書かれているのですけれども、その基盤としての部分のことがやや弱いのではないのかなというふうに思って聞いておりました。

○西座長 それは24ページのところの。

○鳩貝委員 24ページのところにも、まずそのことがちょっと抜けているような。

○西座長 それは24ページには完全に抜けていますね。

○鳩貝委員 その後の説明の中でも、今よりもよりそういう機能を充実・拡大しようという部分が弱いかなというふうに思って。何かもう少し具体的に書けないかなと。

例えば、28ページの上のほうの3行目、友好提携館、研究機関等との連携・協力、調査・研究、それから外部研究者に対してノウハウ等の支援・協力を行うということですが、要するに、一緒になってもう研究・推進していくという、この前のときもお話をしたのですが、例えば大学等との研究センターのようなものがここに同居をすとか、そういう役割まで含めて基盤を整備するというのも入れておかないと、その部分がおろそかになって、表に出る部分だけが重視されてしまうという危険性をちょっと私、感じたもので、お話をさせていただきました。

○木下副会長 改めてこれを見ますと、やっぱり3ページの30年前の理念というのはやっぱりもう少し明確に、第1章で書いておいたほうが良いなど。既に書いてあるのですが、施設概要の中に入っているのですね。これは、やっぱり葛西臨海水族園の理念という形で1つ立てたほうが良いと思うのです。これは30年前の目標であると。しかし、その後述べてきた現在の社会情勢というものは、もうこの目標だけでは足りないわけで、それであるべき姿というものをこれから示すということですので、やっぱり3ページのこの5つの基本的な目標というのが、今どういうふうに達成できないのが不十分なのかということが、この24ページの前文に当たるところできちんと認識を示すということかなと思います。

例えば、最後の学校教育との連携、内外研究機関との交流、このときに社会包摂とかそういうことは多分ないのですよね。あらゆる人に向かって開かれた施設であるというようなことは、その後のこの30年間の社会が求めてきたことなので、だからやっぱり24ページはそれを踏まえて、今はもう今後のあり方というのはこうなのだということで、これにつなげていくというのでいいのではないのでしょうかね。

観光なんて多分、頭になかったらうし、それから種の保存も、これは後で言いかえると言っているわけですから、全てがもう不十分。何よりも「21世紀に向けた」というのは、もう21世紀になってしまったので。だからこれを踏まえて、本当に30年ぶりの改正といいますかね。新しい水族館像を示すということで。

○佐藤委員 まさにおっしゃるとおりだと思うのですが、やはり見事に社会的な側面が抜けたこの目標構築というのが、30年前に起こってしまったわけなのですよね。実際には水族館を具体的に運営していく上でこんなものでは済まなくなり、どんどんこれに社会的な側面がつけ加わってきたというのは、葛西の進化の歴史だったと私は思いますので。その意味で、これが全く不十分であったという評価はきちんとしておかなければいけないのかなと思いますし、その先にどこの方向に行かなければいけないのかというところ

がきちんとここで書かれているのだということを、どこかに示しておく必要があるのかも
しれないなと思います。

○西座長 よろしいでしょうか。大分また宿題が出てきましたけれども。

それでは、その後ろのほうに行きたいと思います。ミッション、ビジョン、プロミスそ
のもののあれはよろしいですかね。24ページは今のよう意見を入れて変えるとして。
それから「あらゆる人たちに海を届ける」はもう少し、ポエムにするのか、具体的内容に
するのかということ、ほかの文章とのレベル感というか、そういうものをよく検討して
書いていただくということで。

○木下副会長 そういう意味では「水の惑星・地球」というのも、ここにすごく唐突に登
場するのですよね。だから、こういう言葉をここに使うのか、あるいはもう少しポエムと
いうか。

○川廷委員 情緒的な。

○木下副会長 情緒的なものを前のほうで使うのかという、このあたりも。ミッション、
ビジョンはやっぱり非常に明快な言葉で、すっきりとうたったほうがいいと思いますので。

○佐藤委員 1つ気になることがあります。今の「あらゆる人たちに海を届ける」のと
ころは、まさに先ほど小林委員がおっしゃったような、接点を実は届けるのだと。接する機
会を届けるのだというふうな表現が一番、具体的で適切ではないかなという気はします。

もう1つ、今改めて読んでいて気になってしまったのは、2のビジョンの最後の「東京
湾や海に関する文化・歴史を世界に発信する拠点」。これは、東京湾に関する文化や歴史を
世界に発信するだけでよかったのかなと。海に関する文化というものを育てる機関でなく
てはいけなくて、その1つの材料が東京湾ではなかったのかなという気がいたします。で
すので、これだとまるで東京湾の宣伝マンなのですよね。それでは不十分であろうとい
う気がいたしまして。

だから1つは、東京湾に代表される海に関する文化という意味なのかなというふうにと
ると、若干読めてくるのですけれども。これ、ぜひ表現を、まさに海に関する歴史や文化、
人類が海と培ってきたかかわりのあらわれとしての歴史や文化をさらに深め、発展させる
のだという、そういうメッセージがここにないと、ビジョンにないといかんだろうとい
う気がいたします。そのために東京湾という非常によい例があるのだというふうなセンスに
していただければと思います。

○千葉委員 24ページにこだわって済みません。「魅力的な観光拠点」ということが⑤に
うたわれておりますね。その「魅力的な」というところの表現はちょっとおやめになった
ほうがいいのか。今、先生おっしゃられたみたいに、ここの⑤番では「葛西一帯の魅
力を高めること」と言っておられますけれども、25ページのほうでは、今おっしゃられ
たような「東京湾」というふうな言葉になっていると。もしこの「魅力的な観光拠点」を
もう少しわかりやすく言うのであれば、例えば、先ほど地域活性というのが小林先生のほ
うから出ましたけれども、地域に根差した観光拠点とか、地域が葛西のエリアであるのか

という議論が必要なのかなというふうに思います。

グローバルとローカルという言葉は反意語ではないと思うのですよね。ローカルのよさを知るために、皆さんグローバルな視点を持ったりするものですから。そうしたところで、例えば25ページ「ローカルな視点」、ここでは「世界有数の大都市東京の水族館」となっているのですが「あれ、エリアとしては葛西ではなかったのだけ？ 」というふうな。そういった観光資源としてもし今世紀見ていただけのでしたら、どこに軸を置いた観光資源であるのかというところも必要なかなと思いました。

済みません。以上です。

○西座長 そこらもよく見ると混乱しているということですね。

○木下副会長 私もローカルなところで「東京湾や海に関する文化・歴史の発信」というのは、やっぱり少し狭いとは思ったのですね。ただ、今回のこの検討会で重ねてきた議論で、葛西にあるあの立地というのは、非常にこれはものすごい潜在力を持っていると。これは後で出てきますが、川と海の結節点であり、それから陸と海の結節点であり、何よりもそこに人間が住んでいるわけですよね。

東京はなぜここに成立したかということを見ると、言うまでもなくそれは江戸という都市の上に乗っかっているのだけれども、江戸が文字通り「臨海都市」という意味なので、あそこになぜ都市が開けたかということにすごく本質的な問題にこれはつながるので、陸と海の接点のところはこの都市があるのだというようなことを考えていけば、ローカルな視点で本当にこれは訴えていける問題だと。だから表現だけの問題で、これは強みといいますかね。この水族館の絶対に打ち出していくべき問題。そのことは結果的に後で、水槽中心の展示にならざるを得ないのだけれども、やっぱり文化展示といいますかね。そのところも力を入れてほしいなという、そういう思いもありますし、そのところをやっぱり今後新しく、新しい水族館像をここでつくってほしいなと思います。

○小林委員 ミッションとビジョンのところの整理なのですが、ちょっと気になったのは、ミッションのところ「あらゆる人たちに海を届ける」という、これは機会を創出することだと整理するとすると、(2)のビジョンのところ「海の魅力を多面的に伝え、多くの人たちの海への興味関心を高める」というのが、これも、ふっと読み飛ばすとすごく似たような文に聞こえてしまって、恐らくグローバルな視点というところで書かれていることからすると、私の認識ではこれは、伝えたいのは海の多様性ということなのですかね。そのあたりを割にきっちり何と何を伝えるのか、それによって何を引き起こすのかというのを整理したほうがいいのかと思いました。

それと、先ほどの東京湾や海に関する文化というところ、今、木下先生のお話聞いていて、これももしかすると「東京の自然と歴史を通して、海に関する文化・歴史を世界に発信する」とか、東京の水と都市、そのぐらい大きなくくりで。東京湾というよりは、水と人の歴史、あるいは、ちょっとそういう……。

○木下副会長 臨海都市という意味合いが強いと思うのですよね。海に臨んでいる都市な

のだという。だから、そのことの発信の場。本当は江戸東京博物館なんかとも連携も本当に今後あり得るような、それこそポテンシャルを持っている水族館だと思います。

○小林委員 そうですね。

○西座長 ありがとうございます。

大分時間が来たのですけれども、ミッション、ビジョン、プロミスのあたりはよろしいでしょうか。

○木下副会長 これ、次回で決定するわけですね。

○西座長 そうですね。

○木下副会長 だから、その事前にやっぱり1回やらないと。

○西座長 それでは、第4章のあり方……。

○佐藤委員 済みません、もう1つ気になるところがございまして。

プロミスのポチでいうと、26ページに行った最初がちょっとよくわからないのですね。「展示水槽のポテンシャルを活かしつつ、空間づくり等にも配慮し、一人ひとりに心地よい時間を提供する」。これは何が言いたいのかなというのがよくわからなくて。多分、本当は最後の「一人ひとりに心地よい時間を提供する」ということをしたいのですよね。それで、そのしたいことと前段がうまく合っていないような気がして。展示だけではなく、空間全体のデザインに配慮して、ということなのかな。というふうな気もしますが、ちょっとこれ、言いたいことをもうちょっとすっきりとまとめていただいたほうがよろしいのかなと。

○木下副会長 これは多分、私が前に、居心地のよさというのが水族館に求められるというようなことの発言の反映かもしれないのですが、確かに私も「一人ひとりに心地よい空間と時間を提供する」というぐらいでいいのではないかなというふうに思いますね。

ただ、展示水槽のポテンシャルを活かす云々は当たり前のことで、そこまで書かなくていいような気もしますが。

それから26ページの後半、下のほうですが「一般的な4つの機能に修正、追加したもの」という、こういう説明はこの報告書の中にそのまま書くのですかね。

○小林課長 このあたりの記載につきましても、まずは事務局案としてこのように整理をさせていただきましたので、ご検討お願いできればと思います。

○木下副会長 結構これは大きな問題で「『種の保存』は、水族館と動物園の相違点を踏まえ、『環境保全への貢献』と言い換える」というのは、かなり大胆な言い換えですよ。「種の保存」と「環境保全への貢献」は、何か全然レベルが違う話ではないかなと思うのですね。

それから、水族館と動物園の相違点をどういうふうに考えるのか。全く別物だとむしろ考えないほうがいいということも申し上げてきたし、それこそ水族館のポテンシャルだと思うのですが、水族館の中に動物園も植物園も含み得るといような、そういうようなことを考えると、何か単純に動物園とは違うので、「種の保存」これどうですかね。むしろ田

畑園長に伺いたい。

○佐藤委員 私もそこにはちょっと一言あるので、お先に済みません。済みませんがおっしゃるとおりで、明らかに「種の保全」は環境保全の中の一部ですから。ですので、これは言いかえたのではないのですよ。より幅広い概念として、環境保全に対する貢献を掲げるという、その意思表示だと思います。その際には、動物園と水族館の違いを踏まえる必要も別になくて、恐らくは本来動物園もそうすべきであり、単純に環境保全の中でどこに力点をより強く置くかというところに若干の違いがあらわれるということだと思います。

ですので「一般的な4つの機能に修正、追加したもの」の中のまず最初のものは、言いかえではないということが1点目と、それから「環境保全への貢献」の中には、例えば調達の問題であったり、それから生息環境の保全であったり、それから種の保全あるいは生態系の保全であったり、そして最終的によりグローバルなレベルでの、例えばCO₂のミッションの削減とか、そういったことがきちんと書かれていないと、中身が意味をなさなくなってしまいますので。

もう1つ忘れていました。あとは教育ですけれども、水族館が環境保全に対して、これらの側面で貢献するのだという記載をここにきちんと書いていただくというのが、非常に大事かと思います。その中に「種の保全」も含まれますと。

○小林委員 2ポツ目がまさに、実はそういうことが書かれているのですね。きっと1ポツ目がなくていいのですね。

○佐藤委員 恐らくもうちょっと2ポツ目もはっきり書けると思うのですよ。具体的な箇条書き的な形で。

○西座長 かなりすっきりしたかと思います。ありがとうございます。

では、ここの問題はよろしいでしょうか。今の4つの機能に追記した、というのはもう一度考え直すということと、環境保全への貢献というのは、しっかりそれぞれの項目を挙げて具体的にどういうことだということを書くということをお願いしたいと思います。

大分時間が来ましたので、できれば次へ行きたいと思いますが。まだ先があるので。相関イメージ図……。

○佐藤委員 ごめんなさい。もう1個だけ。気になることが多過ぎてしまって申しわけないのですが、28ページ「展示」の部分。

○西座長 相関イメージ図はその前ですよ。

○佐藤委員 その前でしたか。ごめんなさい。失礼しました。では、1回戻します。

○西座長 これについてはなかなか、花が咲いたら落ちるという指摘もあったのですが、この中に時間的なものを含めるのはなかなか難しいので、何とかこれで勘弁していただけないかなという気が私としてはするのですけれども。

それで、木を育てるためにはいろいろな要素が必要だというのは、これは外との関連とか、この水族園が周りとの関連ということで、また別のところとの相関図みたいなものが必要になってくると思うのですよね。水族園を中心として、その周りに研究者がいたりと

か、一般の方がいたりとか、そういう人たちとの関連をどうするかとかというものは。ということで、今回は今までまとめてきた水族園の中での機能の相関図ということで、これをすぐこういうふうにするということが具体的に出ればいいと思うのですけれども、なかなかここへ到達するのも事務局は苦勞していたような気がするので、できれば、簡単な修正であれば直したいと思えますけれども、いかがでしょう。

○木下副座長 この図は、この報告書を超えてどこかに出ていくのですか。今後使っていくのかどうか。

○小林課長 実はまだちょっとそこまでは具体的には考えてはいなかったものですが、ただ、6つの機能とのセットになってくるかと思っておりましてので、イメージとしてお伝えさせていただくことにはなろうかと思えます。

○木下副座長 私はすごく納得はいったのですが、ただ、樹木で表現する、せっかく水族館なのに、ということを書いて、それで雨を降らせてもらったのですよ。だけれども、やっぱり雨、地面まで降ってほしいなというのと、それと、新たに水たまりが生まれたけれども、片方を海にして片方は山にするという手もあるのではないかなど。そうすると、この木はまさに結節点に生えていると思えました。

○小林委員 大変細かいことで恐縮なのですが、ぜひ報告書を出される時にこの部分はイラストレーターさんか何かをお願いして、もうちょっとわかりやすく文字の入り方とかも工夫していただけると、多分すごくインパクト強いものになるのかなど。私は個人的には、とてもこれで納得して拍手してしまったほうなので、わかりやすかったと思えます。

○西座長 では、よろしいでしょうか。イメージ図。

○佐藤委員 「相関イメージ」はすごくぎこちない日本語だと思うのですが、せめて例えば「6つの機能の相互関係」イメージはいらぬのではないのでしょうかね。あるいは「相互関係の概要」か、何かそんな感じの日本語に直していただけると。

○西座長 いいでしょうか。確かに「相関イメージ」というのはぎこちないですね。

では、続いて28ページ。

○佐藤委員 ごめんなさい。「取組の方針」に入ってしまった。

○西座長 はい。では「取組の方針」のほうへ入りたいと思えます。

○佐藤委員 「展示」のところのちょっと気になる点が1つございまして「展示」の2ポツ目「水族館に展示する生き物は実物を原則とする」というのは結構なのですが、これが妙な足かせになってしまうと、これは非常につまらない。つまり、実物でなければだめだというふうな足かせにしないようにするというのが1つと、それからもう1つは、今ものすごく発展しているさまざまな映像技術とか、使わない手はないのですよ。それをきちんと駆使して、要するに今後のモデルになるような水族館をつくりたいわけですから、実物を原則としつつ、最新の映像技術等々を駆使した、あるいはインタラクティブな技術を駆使した新しい

展示をつくるのだという、そういう意思表示が要るのではないかと思います。

○池邊委員 今のことにも関係しているのですけれども、その前のページからちょっと気になっていたのですけれども「展示」という言葉が、今おっしゃられたように、これからの映像とか、新しいいわゆる展示の仕方ということを考えると、何か非常に狭い、割と今までの平面的な車窓型の展示みたいな感じに、我々はそうイメージしていないかもしれないのですけれども、どうもそういう気がして。そういうイメージが湧いて、しかも平面的だというイメージがしてしまって、多分、大きな美ら海みたいなものを「展示」と言うかという、それは「展示」という感じでは、機能としては「展示」なのかもしれないのですけれども、人間のほうから見ると、英語で言うと「Exhibition (エキシビション)」になるのでしょうかけれども、ある種のショーではないですけれども、悪い言い方、悪いと言ったら変ですけれども、生物を悪い言い方からすると、アトラクションではないですけれども、もっと魅力的にチャーミングに見せるという意味が「展示」という言葉によって失われるような気がするので「展示」という言葉が随所に見られるのですけれども、何か工夫ができるといいのかなと思うのですけれども、いかがでしょうか。

この花のところにも「展示」「展示」「展示」と。ただ、桜の花のところにも「展示」「展示」「展示」というふうについていると、何となく。少なくとも立体的にとか、あるいは先ほど居心地のいい、例えば座っていて、別に魚をよく見ていなくても、その空間にいるというような、そういうようなものを「展示」と言うかという、多分「展示」と言わないような気もするのですけれども。あと、多分何かもっとキューブとかいろいろな形で新しい展示の仕方みたいなものもあると、立体的な展示の仕方もあるとすると「展示水槽」とか「展示」という言葉がどうもさっきから気になっていました。何か工夫をしていただけたらと思います。

○西座長 例えば、具体的に何かございますか。ちょっとそのヒントでもいいのですけれども。おっしゃりたいのは「展示」と書くと、今までの汽車窓式の四角い2メートル四方ぐらいの水槽が並んでいるような、そういうイメージがくると。もっとダイナミックな大きな水槽があるというのは、イメージしないというような。

○池邊委員 あるいは立体的に通路に沿って水の流れるようなとか、そういうものは「展示」とは言わないのではないかなという気がします。

○西座長 一般が受ける「展示」とは違うことですね。

○池邊委員 イメージとしてはですね。この中の皆さんとしては、あくまで機能としては展示、魚とかの展示だとは思っているのですけれども。

○佐藤委員 まさに新しい「展示」という概念は、この委員会が考える「展示」の概念というのはこういうものだというのを、この「展示」の項目の一番目にきちんと書くということではないでしょうかね。ここでいう「展示」というのは、単に生き物を見せるための、額縁にくくられた水槽のことを指しているのではないと。そこには当然インタラクティブなものも入ってまいりますし、空間の演出も入ってくるし、そうやって総合的な展示のこ

とをここでは指しているのだ、ということを一言書いていただくということではないかと思うのですけれどもね。

○池邊委員 今まさにおっしゃった演出というようなものが「展示」には感じられないので、多分そこを入れていただければ。

○木下副座長 このところは、その前のページから「調査・研究」「飼育・繁殖」という2つの言葉をつないでいるので、これも「展示・空間」とか「環境」とか、やる手はあるかなと思いました。

その次の「教育」は「学習・教育」というふうに広げてもいいような感じがしますけれども。

○千葉委員 そこで1ついいですか。今やっと「展示・何かな」というのをずっとさっきから考えていまして、前回、私申し上げた、レクリエーションが昭和の言葉ではないかという話の中で、ツーリスト、外国人観光客だとかも受け入れることになるであろうというときに、私は「展示・見学」かな。でも「見学」ではないよな。見るというところに関して、見せるということに関しての記述とか視座があまりなくて、ちょっとそれは気になっていたのです。

13ページだったかな。「観覧」という言葉があるのですよね。それで「観覧者」の「観覧」なのですかと、さっきからずっとそのことばかりで。でも「見学」は、見て学ぶという言葉は日本語ではいいのですけれども、何かそれもまたちょっと違うのかしらとか。「鑑賞」ではないですよね。あと「視察」と言ったらまた違いますね。そうした「観覧」という、例えば「観覧ルート」と38ページにも出ているのです。モデルルートのことを言っているのだと思うのですけれども、今、先生がおっしゃられたみたいにアトラクションみたいな感じだと、例えば「展示」も本当にすっきりするのですよね。今の時代。となりますと、レクリエーションというよりも、例えば、何かほかに、もう今となってはちょっと曖昧なのですけれども、ツーリズムとか、横文字のほうが21世紀に合っているのかしらという感じが、何かそういったような印象を受けました。「観光」でもないのだよなと自分で思っておりました。

○西座長 「観覧」という言葉は、博物館では一応見て回る人を「観覧者」というような言葉でよく使うのですけれども「展示・」で「空間創造」とか、何か展示室の……。

○佐藤委員 「演出」だと思うのですけれどもね。

○西座長 「展示」プラス「演出」か。

○小林委員 「展示・空間プロデュース」。

○西座長 「展示・空間演出」。

○小林委員 「教育」についても、恐らく対になるのは「体験」かと思うのですが、いかがでしょうか。もし並べるとしたならば「教育・体験」。私は個人的には「展示」についても、これからの展示のあり方は違うのだということをいつも提唱しているので「展示」は「展示」でいいのではないかと思うのですけれども、確かにそうではない方からすると違

和感があるというのはわかるし、教育もそういう意味では、これからの教育とか、新しい教育は違うのだよということを言っているのだけれども、わからなければ、それは方向性としては「体験」なのかなと思います。

続いて、先ほど佐藤先生がおっしゃられた、実物が原則なのだけれども映像などを使うということについては、今、この「展示」の中の4個目の丸ポツのところ「ICT、光、音・音響等を駆使し」と書かれているのですが、これは恐らく実物を展示する上でそういったことも取り混ぜて使うというふうな整理なのですよ。なので、そうするとそこはやっぱり、もしもそこにこだわらないということであれば、ここの書き方がもうちょっと変わってくるのかなと思いました。

確かにそうなのですよ。今まさに博物館で起こっていることは、映像とかを使ってどれだけ広がりを持たせるかということを生懸命私もやっているところなので、ここに可能性がまた新たに開かれないことはないなど。ただ、今、水族館の現場にいらっしゃる方からすると、どんな方向性を映像とかバーチャルなものに感じておられるのかというのは、またちょっと次元が違う問題なのかなというふうにも思いました。

○佐藤委員 今の点で言えば、書き方を魚類、無脊椎動物、うんたらかんたらという項目、細かいのは全部いらなくなって、水族園で展示する生物は実物を原則とするが、映像・ICT、うんたらかんたらを使うという一文にまとめておけば、最新鋭の技術を使うのだということさえ強調されておれば、すっきりするのではないかと思います。

それから「教育」と「体験」がセットというのは私も賛成ですが、同じ延長線上で先ほどの「観覧」の議論も、実は「体験」しに来ることだとは思いますが。だから「観覧」という単語は僕も嫌いですから、見て体験するという話だとは思っているので、その辺をちょっとうまい用語を整理していただければと思います。

それから、教育のところ赤字で修正が入ったところが結構おもしろくて、利用者の年齢や興味等に沿って解説をしたら、これは双方向コミュニケーションではないのですよ。解説するというのは一方向コミュニケーションでして、これをどうしたらいいかなとさっきからちょっと悩んでいたのですが、「生き物の状態を利用者の年齢や興味等に沿って、双方向コミュニケーションを通じてわかりやすく伝える」とか、そんなふうな形になるのかなと思います。

○池邊委員 もう既に出てきたのかもしれないのですけれども、さっきの「レクリエーション」は私もずっと気になっている言葉なのですけれども「美しい」とか「感動」とか、そういう言葉が全くないのですけれども、私は水族館は、ある意味では動物園よりも感動するところがあると思うのですよね。でも「観覧ルート」とか「展示何とか」とかという、何か生物生態系の展示を見せてやっているという、学芸員の方が展示してやっている、見せてやっているみたいな感じで、実はやはり子どもさんたちとか、例えば高齢者であっても、ああ、自分の見ていた魚とこんなに違うのだという、あと、南のほうの魚はこんなのだとか、南極でこんなふうにして実際にとっているのだとかという、そういうわくわ

くするような、感動を得られるような、そういうところがちょっと「レクリエーション」という言葉からは感じられないので、そこら辺は少し、そういうものはすごく必要なのだと思うのですけれども。

○西座長 ありがとうございます。具体的に何かありますか。「レクリエーション」のかわりが。どうなのですかね。

○千葉委員 本当ですよ。ぱっと思いつかないですね。

○西座長 では、これも宿題にして。大分時間押していますので、済みません。

それで鳩貝先生、先ほどの教育のところの「教育・体験」がいいのか「教育・学習」がいいのか、ここら辺はどう思われますか。

○鳩貝委員 どっちがいいのか。要するに、教育と学習は上と下とか、見方の違いですよ。

○西座長 方向性の違い。

○鳩貝委員 体験というのはまたそれと違うので「学習・体験」と言ったほうが受ける、見る人たちからするといいのかなという。視線、目線としては。

○西座長 「教育」と「学習体験」。

○鳩貝委員 いや「学習・体験」。

○西座長 「学習」と「体験」。

○佐藤委員 「教育」はもう使わないという。

○西座長 「教育」は上から目線だからということで。

○鳩貝委員 というふうに考えることもできるからということで。

○木下副座長 30年後また変わっていると思う。また「教育」になるかも。

○西座長 では、ここはそういうことで、次へ行きたいと思えますけれどもよろしいでしょうか。

○木下副座長 ごめんなさい。今、佐藤委員が魚類、無脊椎動物、全部外したほうがいいのではないかという。私もこれは、哺乳類入れないなら外していいかなと。哺乳類をあえて外しているように見えて仕方ない。

いや、18ページに哺乳類もいる図が出ているのですよ。18ページの「ターニング・ザ・タイド」ではね。水族館の哺乳類もいる。葛西もその可能性を今後残してほしいなと思います。だから外していいのではないですかね。水族館で展示する生き物は実物を原則とするという。

○西座長 「展示」がまた出てくるのですけれども、30ページ「展示基本構想」。それから32ページ「展示水槽の構成」とか。

ストーリーについては、東京の生態系というか、水の生態系で、淡水から東京湾に来て、それから小笠原までという、そういうのと、それから、もっと広いグローバルな感じでの海を代表する生態系という、この2つのくくりでやるということで、これはよろしいでしょうか。

○木下副座長 30ページの真ん中、先ほど申し上げた、人の営みや文化を伝える展示のところの「今後検討することが必要」というのは、もうちょっと踏み込んでほしいなと思います。「展示とその展示スペース等についても確保する」とか。だから、その面積はそれから考えればいいので、やっぱりこれは必要だと思うのですよ。もう既に多くの水族館がこれを行っていますけれども、そのためのきちんとしたスペースはあんまり設けられていないから、これはこういった文化展示も必要なのだというのを明確にしたいなと思います。

○佐藤委員 これの一体どこが世界のトップランナーになる水族館の構想なのかというところを、やはりもうちょっときちんと整理しておく必要があるのではないかと思います。

1つはまさに今おっしゃられたような、人間とのかかわりを文化も含めてきちんと展示するという特徴が今までにない水族館であり、世界のトップを走るのだという主張はできると思います。

それからもう1つ、やるべきことは恐らく、額縁というさっき議論が出ましたけれども、そういういわば展示物として生き物を見せるなんていう発想はもう全くない、むしろ生態系、海が切り取られた展示が次々続くような、そういうふうな水族館になりたいのだよという、その2つの構想をもって、世界のトップランナーになる。だから、文化も含む人間とのつながり、それから生態系、海が本当にそこに再現されている。そういう2つの主張をきちんとして、その点で世界をリードするのだという議論があったらいいなとつくづく思います。

(2)の「展示水槽」の、例えば生態展示や行動展示、あるいは生態系展示をやろうというときに一定の水量が必要というのは、これはもうちょっと強く主張しておくべきであろう。つまりまず1つは、生態系が再現されるためには、やっぱりそれなりの大きさは絶対に必要であると。だから、僕らの用語で言うと「メソコスム」という言い方をしますが、中程度の規模の世界をつくってしまうのだと。つまり、本当に生き物が1種類しかないような水槽なんていうのは一切持たず、基本的にはその1つの生態系をあらゆるそれなりの生き物。サンゴ礁なんかはかなりでっかい水槽がありますよという、そういう水族館を目指すのだというふうな議論と、それが実は経費的にも、設計上も非常にプラスになり得る。

例えば熱効率、絶対水槽でかいほうがよくなりますし、配管なんかもはるかにシンプルになりますし、そういった点をきちんと目指して、新しい水族館のあり方を本当に提案したいのだということをきちんとつくっていただきたい、書き込んでいただきたいと思います。

そういう流れから言うと、だから今の展示水槽の構成はまさにこれでよいのだろうと思いますが、それが、1つ1つがかなり大きな水槽で生態系を切り取って見せますよという、そういう主張がついてくればよいのではないかとつくづく思っていました。

それから、最初の話の中にありました海藻の森の話ですけれども、恐らく岩礁と砂地でかなり海藻の森的なものが、特に、もう別にジャイアントケルプを持ってくる必要はない

わけであって、日本国内の岩礁に生えているアラメ、カジメの世界がきちんと再現できたら、これはもうそれで十分新しいと思うし、温帯の海藻の森がきちんと再現されるだろうと思います。

それから、ここにもう1つ抜けているなと思ったのが、まさに文化の部分が特にハイライトされたような生態系というのが実は存在します。これはいわゆる里海というやつです。人間の活動が作り出してきた里海です。それはいろいろなところに散りばめることができます。例えば、砂地の中にアマモ場再生活活動が入るとか、サンゴ礁の中にも人工的につくられたサンゴ礁というのが今はっきり存在しますので、そういったものもきちんと生態系として再現されるような、そういうふうな作りをするというのと、もう本当に里海というコンセプトの1つの水槽をつくるという可能性と、両方検討できるのではないかという気がいたします。その辺がまさに世界の最先端を走る新しさではないかという気がいたします。

○西座長 今回の佐藤委員の言われた海を切ってきたような、本当の海を持ってきたようなということと文化のやつを「展示基本構想」の最初に書き込むということでもよろしいですかね。3「展示基本構想」というところで。

○佐藤委員 それともう1つ。

そういう大きな水槽をつくって展示するというときに、当然ながら見えにくい、見つけにくいとか、そういった問題が発生するときに、まさに映像技術であったり、水中カメラであったり、さまざまな最新鋭の機器を使ってそこを補うという、そういう発想も大事ではないかと思います。まさに今までにない水族館になるのではないかなという気がいたします。

○池邊委員 ここで改めて「展示基本構想」というふうに書いてあるのはどうしてなのか。というのは、28ページの「展示」のところに、先ほど音響だとか何だとかという言葉がありますよね。その下にも「海が身近に感じられるように」というので「疑似体験ができ」とか。私なんかは沖縄でシュノーケリングを子どもとやったら、子どもが全く海に関する考え方が変わりまして、泳いでいるだけではなくて、下に行ったら。ですから、そういう体験ができると、海の中に潜ってみたいとか、入ってみたいという気持ちがするのではないかなんていう話もさせていただいたのですけれども、この「展示基本構想」のところでこの「展示」というところはどういう関係性にあるのでしょうか。

○西座長 そうですね。何か二重になっているような。

○池邊委員 二重になっているので、整理していただいて。

○木下副座長 これはやっぱり、この構想を示すということなのですよ。多分ここで。

○小林委員 そういう意味で言うと、28ページの「展示」のところであんなことを実現するために、先ほど佐藤先生がおっしゃったような非常に大規模な水量の水槽だったりとか、生態系の展示だったりとか、そういった空間演出だったりとかが必要になるということで、具体的な展示構想があるという整理ですかね。

○佐藤委員 そんな感じですね。

○西座長 大分時間がなくなってきたので、もう事務局へ押しつけます。(笑)。

今のような方向でやっぱり整理しないとちょっとあれなので、28ページの「展示」とここの関係ですね。整理をしてください。

○小林課長 まとめ方なのですけれども、前段が「展示・空間演出」という、機能として基本的な考え方は書かせていただいたほうがいいだろうと思っています。例えば最後のところに、次の構想について考えるというようなことをちょっと書かせていただいて、それとつながるようにさせていただくとか、そのような整理でもよろしいでしょうか。

恐らくなのですけれども、この並びとしまして「展示・空間演出」を一番最後に持ってくる、前段で考えていただいた6つの機能とのバランスがまた崩れてしまいそうなどころもございまして、ちょっとそこは間があいてしまうかとは思うのですけれども、うまく言葉をつないでという形でよろしいでしょうか。

○佐藤委員 今のはそれでいいと思います。「展示の基本構想」の部分で、やっぱりここで1つ抜けているのは、展示素材である魚、あるいは水族の調達の基本構想をやはりきちんとここで述べておくべきではないかと。これは特に環境保全への貢献として。

つまり水族園がもし生き物をとってきて展示するのであれば、それはあくまでも持続可能な漁業から得られたものでなければいけなくて、例えばMSCを持っているような漁業、ASCで養殖されたものというのを中心に使うし、それから、もしどこかの漁協さんと共同して採集活動をするのであれば、その漁協さんの持続可能なプラクティスを高めるためのあらゆる支援を水族館がしますよと。最終的には一緒になって、MSC申請まで持ち込みましょうかみたいな、そういうふうな持続可能な資源利用に対する貢献をしながら収集をする、調達をするという議論は、これはもう今や企業であれば当たり前のことのようにやることでございまして、水族館でも当然それはやるべきだろうし、それもまた世界に対して新しいメッセージを、水族館というものは、持続可能な水産物の生産・流通に本当に貢献しようとしているのだという議論を、ここの「展示の基本構想」の中で述べておく手はあるかなという気がいたします。調達に関しては、前のほうでちょろっと述べられただけで詳しくは述べられていないので、恐らくは「展示の基本構想」に含まれるべきものではないかというふうに思います。

○西座長 ちょっと今、いいですか。僕、MSCあんまり知らないのですけれども、これは水産物や食品ですよ。野生動物としての海洋生物を持つてくるときに、それをそのまま当てはめると、問題になるかどうかは僕知らないのですけれども、そういう精神でということでもいいですよ。

○佐藤委員 まずMSCに関しては、持続可能な漁業のプラクティスを認証しますので。製品になっていなくても、漁業活動自体を認証しますので。とってくるという活動を認証します。ですので、水族館が調達するときに、どういう漁業者さんから買ってくるかということに関しては、極めて適切なラベルだろうと思います。

○木下副座長 今の問題は、28ページの「各機能における取組の方針」の「飼育・繁殖」の一番最初に少し書かれていますよね。「生き物の収集は」という。ここをもっと書き込めばいいのか、それか、そうするとその前に「飼育・繁殖」だけではなくて、やっぱり「収集・飼育・繁殖」かなという。

それから35ページに、今度は具体的に「展示水槽をつくるにあたり考慮すべきこと」ということで、入手の段階からここで書き込むということもありかなと思います。

○佐藤委員 今の私、基本構想のところに入れたかった心は、それは本当に中心的なメッセージとして世の中に出したいという。つまり、これも考えますよという考慮すべきことではなくて、まさにこれこそ新しい葛西の新しい部分だということを示したいと思って、今ここがいいかなという提案をいたしました。この辺はもう事務局にお任せします。

○川廷委員 さっきのMSCのことを補足しようかと思ったのですが、漁場認証と流通の認証によってMSC、ASCは構成されているのです。ですので、漁場のほうの認証でやるということを佐藤委員はおっしゃった。

あとは、一番最初に僕が言いましたムーンショット、バックキャストの話を実はこの中に、これはあり方の検討会なので、世界で冠たるということを使うならば、そのスケール感であったり、リアリティであったり、そういったものをもう少し最後記述して、こういうあり方、こういう展示をイメージしているということを、本当は書いていただいたほうがいいのではないかなと。では、どれだけの水量の水槽をボン、ボン、ボンと3つあるみたいに、そういうスケール感のことも本当は書いていただいて、こういうものを目指すと言ってもらったほうが、この議論のプロセスもわかりやすくなるのかなと感じました。

○西座長 ぜひ、そのムーンショット。

○川廷委員 お願いします。

○西座長 本当に済みません。かなり時間が来て。運営の方針とか、そちらのほうに移りたいのですがよろしいでしょうか。

○佐藤委員 済みません。その前に1つだけよろしいでしょうか。

大洋という生態系の展示はクロマグロがメインであっていいのかというのは、当然考える必要があると思います。当然ながら、マグロ・カツオ類を中心にするというのはありかなとは思いますが、そうしたらもっと、クロマグロだけがいればいいという話ではなく、もっと多様なマグロ・カツオ類が必要だろうなど。

それからまさにこの部分で、MSC認証を漁業者と一緒にとっていくといった活動が本当に可能な部分なので、そこをより幅広く、いろいろな種を扱う水槽になってくれたら、はるかに生態系に近づくなという気はいたします。

○西座長 「運営に関する方針」とか「施設性能」「その他」についてご意見、もうあんまり時間がないのですが。

○池邊委員 「運営に関する方針」の1の「ファンの増やし方・広報」となっているのですが、ファンだけではやっていけないので。今サッカーやっていますよね。ファン

だけではなくて、ファンはみんなきのうちちょっと寝不足になったぐらいで、サポーターは現地まで行きますよね。やっぱりボランティアの人だけではなくて、あと、CSRでやってもらえる企業の方もそうですし、学校の先生方もそうですし、やっぱりサポーターというのをきちんと位置づけて、いろいろなサポーターがあっという間と思うのですけれども、ファンとサポーターはとても大事なかなと思っています。

○川廷委員 「経営の視点」のところ、多分、価格設定の話も出ていましたけれども、現状の価格から価格を上げることで、それだけの大きな展示・演出によって魅力をつくれれば、当然、価格もそれに反映する。そうしたら、その経営というか経済循環、価格を上げたことによって好循環を生むという経営の視点は、ここに必要だろうと。それによって、先ほどから出ているMSCのことであったり、大型の水槽の維持・管理であったり、ただ、大型にすれば経費も削減できるという佐藤委員の話もありましたけれども、そういった視点をもう少しここを盛り込むことによって、まさに持続可能性ですよ。世界にも冠たる水族館の持続可能性、持続可能な経営を考えていくという視点は入れていただいたほうがよいのかなと。でないと、またその30年後に、持続不可能なビジョンだったのではないかみたいなことは言われたくないなという気がしますので。

○西座長 ほかにはいかがでしょうか。

○鳩貝委員 だんだん大きな話も出てきたので、ぜひ世界に冠たる水族館として存在をし、維持していった発展するためには、先ほどちょっと申し上げたのですが、一番基盤になる学術研究、調査研究は非常に重要だと。ですから、いわゆる水族館学ではないのですが、そういう学問的なものを、例えば漁業ですとか、いろいろなものを全部含めて、学問として体系づけるような研究拠点になるのだという。要するに飼育して、展示しているというだけではなくて、新しいそういう体系的なものをきちんとここでやっという。ほかの機関と協力しますよ、データをあげますよというのではなくて、自分たちがその中心になるのだと。

多分、今、博物館学なんていうのは、まだまだ最近の話ですよ。いろいろな博物館の関係者の皆さんがそういうことをやってきて、そしてそこでのコミュニケーションだとか、そういうようなもの、展示の方法をどうするか、さまざまな研究が進んできたと思うのですけれども、水族館も先ほどの見世物からだんだん変わってきて、そして地球全体のことまで考える我々の文化にもつながっていくという、そういう1つの学問体系としての見方、考え方を養っていくという、大見得を切るようなことはできないでしょうかね。

やっぱり世界に冠たるというのは、それではないのかな。商業施設ではないのだし、ということも。東京都がやるのだからこそ、僕はそれができるのではないかなというふうには思うのですが、何かそういうことはできませんでしょうか。ぜひ世界のトップランナーとしては、それが必要なのかな。それを支える、先ほどのサポーターという話がありましたけれども、世界中の研究者がここに集まってくるという、そういう拠点になる必要があると思います。

○池邊委員 ハブになってね。

○川廷委員 そのためには経済循環も。

○佐藤委員 本当にそういうことができたなら楽しいと思います。そのときに、実は非常に注意しておかなければいけないのは、水族館でできる研究と、水族館がすべき研究をきちんと分けておかななくてはいけなくて、できる研究はより細かなものができてしまうのですよ。例えば簡単な、簡単なと言っては失礼だけでも、割とシンプルな分類学とか、いろいろなことに貢献できる要素はあるのですが、本当に水族館がいわば1つの機能としての研究をしようというときに、単なる飼育技術でもなく、やはり本当に最終的なミッションに貢献する。特に持続可能な社会に向けた動きを加速するための研究であったり、あるいは人と海のつながりを深めるための研究。その辺の研究をきちんとやるのだというビジョンがないと、うっかりすると、できる研究に落っこってしまうのですよね。そっちのほうのビジョンを高々と掲げると、これはそれなりに投資が必要です。本当にきちんとした研究者が相当本気で、中にいて動くという作業になると思います。ですので、そこをどこまでやるかは結構難しい部分もあるのではないかと想像できますので、少なくとも望ましい研究の姿を報告書としては描くというのが大事なのではないかという気はいたします。

ですから、やはり先ほどの、ちょっと話が戻ってしまって恐縮なのですが「調査・研究」のところ、27ページの(2)のところ「繁殖技術や生態解明」というのが最初に来ているというのは、では多分違うだろうなど。これは割と大事な基礎的な研究ですけれども、この水族館が本当にやるべきものではなくて、教育や環境保全への貢献の部分に関しての研究をしっかりとやるのだよという議論をしておかないといけないのかなという気がいたします。

○小林委員 そうすると、ここにミュージアムマネジメントも加えるということですね。

○佐藤委員 そうですね。博物館学的な部分がしっかり入っていないと。

○小林委員 先ほどサポーターというお話が出たのですけれども、私も事前のご説明のときに申し上げていたことと重なりました。

例えばキッズクラブだったりとか、友の会だったりとか、賛助会だったりとか、いろいろな呼び方はあると思うのですけれども、そういった組織の育成と、ファンドレイジングも含めた、社会のさまざまな個人にしる、団体にしる、どうやって水族園や、それが目指している社会貢献にかかわっていくのかという仕組みづくりをつくるというようなことが、1つ視点としてあってもいいのかなと思います。

それと1つ、これは具体的な提案なのですが、4番の「経営の視点」の中に「ボランティアがやりがいを持ち長期的に取り組める仕組みを整備すべき」とあるのですけれども、これはなかなか博物館も陥りがちなところなのですが、ボランティアは根本的には生涯学習のための組織というふうに位置づけたほうがよろしいのかなと思います。彼らのための生涯学習の組織であって、その活動が結果的に来館者のサービスの質の向上につながるのだと。それからその活動が結果的に、例えば経営面でも、博物館や水族園の運営を

サポートするようなことになるのだという考え方でなければいけないと思うので、これについては「ファンの増やし方・広報」のほうにむしろ入れてもいいのかなと思います。この方たちの組織も含めて、水族園を支えてくれる一番ファン代表というような考え方をとったほうが、私としてはしっくりきます。

○千葉委員 今のボランティアの話のところも気になりましたので、先に。

ボランティアの語源は志願兵、志願している人ですから、それで無償と有償で大きくクオリティが違って、先ほど江戸東京博物館のお名前が出ましたけれども、あそこで江東区の無償のボランティアガイドをやっているのが友人でいるわけですね。そうしますと、非常にそのクオリティにばらつきがあるだとか、ボランティアについてはもう明らかに観光の側面もあって、項目としては「経営の視点」ではないのではないかなと。そのようにも思います。そして、やはり有償ボランティアをきちんと育成するのだよというふうな、そういった流れのほうがよろしいのかなと。

前後して申しわけないのですけれども、36ページの(1)の、先ほどファンとサポーターというお話が出ましたけれども、この「広報」という言葉も、川廷さんが一番あれだと思うのですけれども、これはプロモーションなのかパブリック・リレーションズなのかというところですよ。やっぱり「広報・PR」みたいな形に言葉としてはするのかもしれない。

ここの「ファンの増やし方」のところとは別に、(2)番で「情報の発信」。「情報の発信」に、3番目のポチで「観光等でも」というふうに、「でも」ではなく、観光者、ツーリストが利用しやすいようにですよ。「観光者が利用しやすいように、利用目的や滞在時間に合わせた」、これがまた「観覧」になっていますけれども「モデルルート等を発信」というか、これは「準備する」。やっぱり多分、観光の視座がもう1つ必要になっていく、ツーリストの視座が必要になってくるのかなと。

お金を落とす仕組みづくりの中で、滞在時間滞留時間をやっぱり増進させることも1つかもしれない、前、レストランで江戸前のお寿司を出すとか、レストランのメニューが重要ですよと言っていました、長くいればいるほど施設にお金を落としてくれるわけでありまして、そういったようなところとか、もうちょっとよくここの部分は考えられたほうがいいのかというふうに思いました。

もう1つだけ、済みません。私すごく「体験と交流」というのが観光の世界で今、交流の時代だ、体験の時代だということで盛り込んでいただいておりますけれども、これからは交流からさらにもう一歩進んで、共生の時代になると思っています。この間、日経新聞でも外国人観光客が労働者になったり、留学生になったりということで「交流から共生へ」という大タイトルで1ページできていたと思うのですけれども、多分この水族館は共生がテーマになるのではないかなとすごく思っています、例えば美ら海で、レストランの脇にわーっとサメが、食べている脇でもう上にあがっていくとか、八景島はトンネルを歩いて移動しているときに上を魚が泳いでいるとか、単なる展示ではないという

ころで、アミューズメントなのかアトラクションなのかというお話ありましたけれども、きっとそういうふうになっていくかと思われまして、もうちょっと共生という言葉在前面に出されるのも、さっきの木の絵のところにも人のイラストで、人もお魚も一緒にいますみたいな、そういうイメージがあったほうがいいのかなど感じました。それが日本人だけではなく、多様な人が共生していますよというような水族園のイメージです。

長くなりましたが以上です。

○西座長 もう時間がなくなってきました。短くお願いします。

○川廷委員 端的に言います。広報のところは、いろいろ言い始めると長くなってしまいますので、コミュニケーションなのですね。アウターコミュニケーション、インナーコミュニケーションという考え方があります。ですから、それをどう整理するか。インナーコミュニケーションも実は重要です。

それから、さっきのボランティアの定義です。これはコストで考えるか、投資と考えるかなのです。コストで考えるのであれば、これはあくまでも、本当のボランティアですけども、それをやることによって、この館の育成にもつながっていくという視点があれば、明らかに経営なのですね。ですので、その整理をしたほうが良いという話。

さっきの木の絵の花と木にけちをつけたのは僕なのですが、ここは雨が入ったことによって、雨はこの館を育成するという観点で言うと、まさにボランティアの方だったり、サポーターだったりという考え方も入ってくるので、もう少しこの木の絵は要素を整理したほうが良いかなというふうには感じております。

以上です。

○西座長 ありがとうございます。まだまだご意見あるかと思うのですが、時間が迫ってきました。

それで、ここまでずっとまとめてきたのですが、1つ私のほうから提案がありまして、これだけ熱い議論をしてきているのですが、第4章のまとめとして「その他」となっている部分も含めて「望ましい整備の方向性」というような項目を足したらどうかと。

先ほど言われた東京湾に面している海と陸との接点である、そういうことがあるので、公園と一体感のある整備をすとか、それから先ほど何度も言っていた、日本を代表するトップランナーとしてのことだとかというのが、言葉としての強調性が抜け落ちていっている。そういうものをここにやって、それでももちろん充実した展示、「展示」という言葉も大分問題になりましたけれども、魅力的な、現在よりも大きな水槽をつくって、そこで、水槽というよりは海を切り取ってきたような、そういう空間をつくっていくのだというようなことを、ここで整備の方向性としてまとめる項目を1つ、つけ加えたいと思うのですが、事務局も含めて、宿題ばかり出してあれなのですが、いかがでしょうか。

○小林課長 事務局としましては、そのように取りまとめていただくというのは、問題はありません。

○西座長 最後のまとめになるかと思うのですけれども。

それから大きな問題、我々話しているときに前提として話していると思うのですけれども、建てかえが必要だとか、それはきっちりと書いておくことも。

○川廷委員 なるほど。言葉が入っていないですね。

○西座長 もう前提として話しているものですから入っていないのですけれども、現状はやっぱりあのままではユニバーサルデザインでもないし、もう30年前の、先ほど言われたいろいろな欠陥がある、そういうものをきっちりと最後に整理してまとめて、読む方がそこを読んでもらうと大体方向性がわかるというようなまとめをつくるということで、よろしいでしょうか。

済みません。時間が迫りました。十分ご意見いただけなかったところもあるかと思いますが、ふなれなところでお許しいただきたいと思います。

では、事務局のほうに戻したいと思います。

○小林課長 西座長、ありがとうございました。

次回は最後の検討会となります。本日お配りさせていただきました資料の中に、今後のスケジュールがございます。次回7月下旬を予定してございます。詳細は別途ご案内をさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

なお、報告書、それと概要版の作成につきまして、引き続きまして委員の皆様ともご相談させていただいて、ぜひ次回、第5回にお出しさせていただければと思いますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

以上をもちまして、第4回葛西臨海水族園のあり方検討会を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

(午後4時56分終了)